

風土



牡丹焚く

神蔵

器

煌々と聖歌ののぼる小名木川
川一つとんで翁に御慶かな
初富士や標高三七七六
ゆめに見し西行庵の霜柱
とくとくと寒九の滝の華厳かな

牡丹焚くあをき炎に恋をして
田一枚元旦の水張られたり
福藁に動くものみな初雀
胸を突く激痛これも御慶かや
わたるべきか渡らざるべきか霜の橋
死もなつかし一輪挿しに水仙花
寒きびしそれだけ春の近づけり



竹間集

同人作品



「老樹」以後(十一) 野沢しの武

依頼したること忘れぬし桜桃忌
独り居に紫陽花の雨見てをりぬ
とり残さるる思ひホームに梅雨長引く
梅雨晴間会葬をまた人頼み
滝三筋白神山地撫撫撫
一日雨常より日暮早き夏至
送り梅雨会員名簿重く届く

数へ日 鈴木石花

桂郎忌に続くくらら忌の初冬
捨て難し机上に一つ牡蠣の殻
繕うて読む初版本冬さうび
眉筆に般若心経冬木の芽
来年の干支アート書に金絵具
数へ日の予定溢れてしまひけり
山四方に川見下して年送る

花 鯉 岩木茂

炬話の間となる薪を焼べにけり
結論は意外な方にかいつぶり
クリスマスイブ香り立つラ・フランス
雀降りてとんとん弾む手鞠唄
大敷網を眼下に雪の千枚田
降り積もる淑気の中に大社
花鯉生きて揺らめく雑煮椀

餅の手

相沢有理子

寝ねがてに古銭帖繰る寒夜かな
新妻の 一つ 覚えや 鮪 舟
餅の手の生徒六十路やまばゆき灯
焼き牡蠣に舌焼く一家声弾む
船の灯について群れとぶ冬かもめ
点滴に臥す窓枯れ木鳴るばかり
鳥声も聞かぬ寒暁白湯たぎる

十二月

小林輝子

鉦漬に糲のなじむ梧逸の忌
賜はりし柚子と遊べる仕舞風呂
路線バスゆつくり走る十二月
これ以上齡増えるなど忘年会
風が樹々撓めてメリークリスマス
只白く唯黒く山眠りけり
狐火のやうな灯除夜の堂

立 冬

田村すゝむ

立冬は我が誕生百
立冬以後我が生涯の持ち時間
三山の 一つ 消したる雪起し
袖摺といふ名の坂や銀杏散る
その奥の御所の腰高白障子
数へ日や白鳳仏を見て帰る
人生は誤算ばかりや日の短か
踏台に乗つては降りる十二月

都 鳥

塩田博久

日本橋室町一丁目
爽やかや松尾桃青立機の碑
深川は蕉風の故地都鳥
一茶忌や咳止め飴の離されず
寒鯉の水ごと凍てしごと沈む
忘年会女の遅参まとまりて
冬薔薇をくぐりて回覧板とどく
着ぶくれて逆心無きにしも非ず

去年今年

塩田 博久

年用意欠礼状のやりとりも
末つ子のバレエのポーズ初便り
スーパーパーに琴歌流れ若菜籠
読み初めや栞の分かつ去年今年
買ひ初めはネット通販日本書紀
バス停に朝の顔ぶれ初氷
バスの中咳きいて視線を一身に
服喪とは着ぶくれ炬燵無精髭
老いの眼に少年の日の寒北斗
たれかれの忌日書き込み初日記

山河集

同人作品



神蔵
器選

マスクしてマスクの医師の言葉待つ

落合 絹代

チャリテイのアカペラを聴く師走かな
馬小屋を設ふ学舎クリスマス
集合は聖樹の真下丸の内
東京のまして御苑の三十三才

胸を反り頭を上げてスワン来る

上辻 蒼人

冬日輪低く成りたる宮址かな
頭上げ聞き耳立てて冬雄鹿
あと書きより読む遺句集や冬日落つ
時雨傘すぼめて下る歩道橋

裸木となるべく一葉離しけり

間島あきら

綿虫の淡き命を掌に囲ふ
綱一本締めて終はりぬ年用意

豊頬の大日如来冬うらら
ケータイの着信表示三十三才

初日射す幾万の波引き連れて

吉永すみれ

火の島を正面に据ゑ冬座敷
寒夕焼殉教の島包みけり
首塚は十郎五郎笹子鳴く
今生の出逢ひは一度冬銀河

筑波山天辺見せて時雨過ぐ

横田 壘子

節くれし手の揃ひたる浜焚火
カーブミラー湯気の吹き上ぐ霜の朝
とどのやうな冬雲一つ筑波山
どの船も雪を積みたる港かな

◇特別作品◇(抄)

国東半島めぐり

工藤はるみ

紅葉散る宇佐神宮の赤鳥居
枯蓮水面に影や宝物館
大楠のパワーに触るる年の内
冬晴や真木大堂の仏達
伏目せる阿弥陀如来や冬ぬくし
六道の明王像や灯の冴ゆる
日本一の不動明王あたたかし
寒き日や鉄の仏に触れもして
手に触れし石も仏や冬薔薇
石仏をめぐる綿虫連れもして

風土集



神蔵器選

咳こぼす武蔵一國札所口

藤枝

間島あきら

冬あたたか馬乗りに御す綿繰り機

鶴来るシベリア便り背に負うて

大根を抱へて落柿舎巡りをり

富士聳てる日の傾きや三十三才

お点前の後の白湯なり笹子鳴く

川崎

内藤 静

忘年会のちの家路のちりぢりに

風花や僅かの喜捨を雲水に

忘年の子等合唱の第九かな

クツキーの星を聖樹のてつぺんに

舞鶴

福田 周草

降る雪の町に老い来し月日かな

省くこと枯木の如し古日記

生くるものに真水を流し山眠る

人声の耳に触るるはあたたかし

短日や最高気温摂氏九度

横浜

下山田美江

畳替ふ臨春閣の床柱

障害者のスプーンフォークや寒卵

新刊の「微分積分」文化の日

健啖の子規の献立煮大根

身の節をきします韋駄天寒波かな

川崎

鈴木 庸子

探鳥の一行らしき着ぶくれて

電飾の街に疲れし十二月

モーツァルト聞かす果熟庫山眠る

とぎ汁に湯通す面取り大根かな

川崎

井口ふみ緒

園庭に増ゆる冬星園長逝く

凜として鳥居足石冬ざる

銭洗ふ鎌倉の山眠りゐて

その中に動かかぬ予定十二月

年惜しむメンバー十五いとこ

記憶より記すは確か日記買ふ 大和 落合 絹代

独り言も感謝のことば柚湯して
数合はぬものに錠剤年は逝く

帰宅してすぐにエプロン日短し
マスクして化粧せぬ日の小買物

黄落やその名知る樹も知らぬ樹も 相模原 雲所 誠子

短日の針を進める花時計

京に来て錦市場に見る師走

聞き役に徹してをりぬ枇杷の花

竹林の百幹寒に入りけり 仙田 孝子

黄落や山ふところの薬師堂 川崎

カメラマンの肩越しに見る瑠璃鷄

万葉園

うたごとに添ふ草木も枯れに入る

数へ日の通院二つ済ませけり

欠礼の通知の届く冬ざるる

命の色内に秘めたる冬木の芽 香取 横田 晶子

み仏をくすぐるやうな煤払ひ

枝先に枯葉一枚いつまでも

時雨くる横断歩道犬抱へ

当てにならぬ夫の顔ある師走かな

垣内に鶏放ちあり冬うらら 生田 作

冬麗の真ん中に敵立てにけり

美作に冬の虹立つ峠かな

畦越しに声かけらるる雪来るぞ

まどろむや時雨来て去る理髪店

桜灰の釉薬青き小六月 津山 生田恵美子

信号を一つ違へて日短

風邪の神まだ来ず朝の冬林檎

頬骨を摩り焚火の輪にをりぬ

斜交ひに断つ青竹や年用意

おでん鍋箸の動きを子に添ひて 津山 安永 圭子

児の抜歯兎を飼ふと約束し

チャイコフスキー聞こゆるけふは冬至風呂

樽出して白菜漬に思ひかな

相模湾朝日昇るや蕪村の忌 横濱 池田加代子

降圧剤一錠増えし十二月

歩行者天国皆仰ぎ行く大聖樹

枯れてなほメタセコイアの良き姿

煤掃きて花蠟燭を仏壇に

縫ひ溜めし母の雑巾年用意 横濱 佐野つたえ

前を行く人の後ろに咳きぬ

これからの十年思ふ初日記